

供することで、細かい需要にも応えられること  
増加、結果的な商圈拡大へとつながるのだろう。  
が観客側に信頼感を与え、さらにリピーターの

## 結婚式の流行 —結婚情報誌ゼクシーを参考—to

原 田 裕 子

この論文では、結婚情報誌「ゼクシー」の広告のデータを基に東京都内23区での結婚式の流行の変遷を調査する。この「ゼクシー」とは株式会社リクルートが発行する結婚情報誌であり、結婚を考えるカップルたちが自分たちの結婚までをいかにすすめるかを検討するための情報誌である。ホテルや専門式場、レストランなど様々なスタイルのウェディング会場をはじめ、ジュエリーやドレス、引出物、二次会会場など結婚式に関わる情報が掲載されている。

今回の、流行の調査の対象となるのはゼクシー創刊の1993年7月から2006年11月までの中の64号とした。この創刊時期はいわゆる「ハデ婚」と呼ばれる結婚式が流行したバブル期の崩壊後となる。

調査方法として、1993年から2006年までのゼクシーの広告ページ数割合と、その掲載されている式場のデータを利用しGISを使用しての立地分析も行う。

その結果、創刊当初は主流であったホテルと

専門式場での結婚式は、創刊のころからすでに始まっていたのレストランウェディングに押され、その件数を減少させた。しかし、そのレストランウェディングも1996年以降に登場したハウスウェディングに押され、現在その件数を徐々に減らしている。一方、いったん減少したホテルでの結婚式も、2000年以降に東京に続々と建てられている外資系高級ホテルでの結婚式によりその割合を増加させ、現在に至る。今後は外資系高級ホテルを含めたホテル、神社や老舗の専門式場、ハウスウェディングが結婚式の主要な式場となっていくと考えられる。

また、GISで見た都内の式場の立地は、都心南部にその多くが集中しており、その反面都心北部では、まったく式場の立地が見られないエリアもある。1993年以降の式場の立地は1990年代の都内の再開発の影響を大きく受けており、今後も都内の再開発とともに、新しくできる式場の立地や、現在までにある式場の今後が左右されていくと予想される。

## 日本人ムスリマのイスラーム翻訳と受容 —首都圏における勉強会を事例として—

最 上 直 子

本論文は、日本人ムスリマがどのような経路でイスラームの知識を取り入れ日常における信仰生活の困難を解決しているか、という問題意識から出発した。まず、近現代においてイスラームが世俗化し宗教が公的領域から撤退することにより私的領域では信仰が強化されるという点に言及した。また、現代的要請に反することなく信仰を追及したり、エジプトのファトワー委員会の「裁定」に関心を示しそこから安心感を得ているムスリマがいることを記した。

1990年代、中東からの出稼ぎや、グローバル化の流れに乗って日本にやってきた人々が入国したことによりムスリム人口が増え、その多くが二十代から三十代の男性だったことから、日本人女性と結婚し2005年現在では子どもを持つ世帯があることがわかった。

大塚モスクの勉強会では、日本人ムスリマからインドネシア人講師へ質問がされ、回答を得ている様子が観察できた。このやりとりから、日本人ムスリマたちは自らの行動がイスラーム

の規範に沿っているものであるか、また、よりよいムスリマとしての行動を講師の回答に求めているということがわかった。「お茶で語ろう」の勉強会では、先輩のムスリマに若いムスリマが相談する様子を伺えたことから、参加者それぞれが精神的解決を得ていると考えられた。

結論として、経験を持つムスリマのアドバイスが他のムスリマに安心感を与える様子は、エジプトにおけるファトワーに類似するものであ

るといった。日本人ムスリマが日本でイスラームを信仰するためには、教義の一部を変化させながらイスラームの根幹は守っていくことが求められる。「ファトワー」こそ、日本におけるイスラームの翻訳であるといえるだろう。ムスリマたちは勉強会に参加することによって、イスラームを翻訳し自らの行動を選択しているのである。

## 沖縄を通して見る『アメラジアン』

森 亜紀奈

アメラジアンとは、AmericanとAsianを足して作られた造語であり、アメリカ人とアジア人という複数のルーツを持つ混血のことを指す。本論文では、アメラジアンが米国によるアジアでの戦争と軍事支配という状況下に多く出現したことに着目し、地域を日本で米軍基地が集中している沖縄に焦点をあてた。

米軍基地が沖縄に置かれ、そこで現地の女性と米軍人の社会的接触が起こった結果、生まれたアメラジアンたちは身体に「基地」を背負ってしまった自分自身の経験から、教育権問題など基地という背景を通さない国際結婚とは異なる問題を経験する。

1998年には沖縄に日米二つの言語・文化に誇りを持ちダブル・アイデンティティを育むことを目指して、アメラジアン・スクール・イン・オキナワ (AASO) が開校した。学籍回復の運動や「基地の落とし子」という視線を跳ね返し2つのルーツを大切にしていこう、とする「ダブルの教育」を実践してきた。

本論文では現在までのアメラジアン研究の中

で触れられることがほとんどなかった、AASOに通ったアメラジアン達、そしてAASOにボランティアとして関るアメラジアン二世のライフヒストリー聞き取りを通して自己認識や経験を伺うことを基に、沖縄におけるアメラジアンの今後の可能性や展望を考えていく。アメラジアンの若者たちは、自分自身のルーツを受け入れる過程に違いはあったものの、皆自分を「アメラジアン」として肯定的に捕まえ、また自身のルーツの多様さを生かして進路や職業を選択しようとしていた。

またアメラジアンは身体が国家に規定されない存在でもある。韓国にもAASOのような学校がある。人種や国家という枠組みを越えて連帯していくことで、アメラジアンが様々なルーツを持つ人々との外に開かれた連帯のさきがけとなれる存在であることが見直された。同時に、今後軍事化による人種の混合がエスニシティに与える影響に関して新たに考えられていく必要がある。